

## 中国の住宅政策と伝統文化 ——四合院再評価の提起するもの

(東海大学) 中野 謙二

### はじめに

北京を何度か訪れた方なら、近年の変化の激しさに驚嘆されるであろう。とりわけ目立つのが、拡幅された主要道路と新築のアパート、高層ビル群である。この変化を一面において、近代化ともなり市街地再開発であり、住環境の改善だと評価することはできる。

しかし同時に、無計画なビル建設によって、古都の面影が失われつつあるとの反省が出ているのも事実で、1990年8月北京で開かれた歴史都市の保存をめぐるシンポジウムでは、「北京も東京やニューヨークのようなコンクリートの森になりかねない」との声が、中国側出席者から聞かれた<sup>(1)</sup>という。最近、伝統的な四合院（スーホユアン）住宅を保存、もしくは再現させたいとの動きが強まっているのも、そうした懸念と決して無関係でなからう。

このケースにみられるように、中国の近代化は一定の成果を収める半面で、新たな課題に直面している。西欧文明を積極的に導入するものの、きまって揺れ戻しを生じ、順調一途の発展をみせていないのである。このことは、度重なる経済政策の調整や、89年6月の天安門事件に象徴される政治的不安定さでも感じさせられたことである。試行錯誤と紆余曲折はあらゆる分野にみられる、といって過言でない。

考えてみれば、社会主義国が市場経済、競争原理を取り入れて体質改善をはかるのは、国際社会における壮大な実験である。ましてそれが、歴史と伝統文化を誇る中国においてのことであってみれば、外来文化の吸収・消化に抵抗を生じ、その

過程でさまざまな矛盾、相克を起すのは、むしろ当然なのかも知れない。問題はそうした矛盾・相克ををどう解決し、いかに調和させていくかであろう。

以下に、そうした観点から首都北京の住環境に焦点をしぼり、近代化への過程と、そこに生じつつある伝統文化との相克について、検討を加えてみたい。

### I 伝統文化としての四合院

最初に、体験的印象論を述べさせていただきたい。

筆者が北京に住んだのは文革末期の76年から、近代化が本格化する以前の79年までだが、そのころ、高層ビルといえば北京飯店と民族文化宮、電報大樓くらいだった。高さ50mの景山公園に立つだけで、市街を一望にすることができた。眼下にひろがる故宮の金色のいらかが、陽光を受けてきらきらと輝き、その先に天壇の祈念殿を望むことができる。西には北海、中海、南海が水をたたえて横たわり、北は鼓楼、鐘楼が指呼の間にあった。いずれも封建制の象徴以外のなにものでもないのだが、歴史をしのばせるには十分な景観だった。

また、それら建造物を取り囲むように、四合院と呼ばれる石造りの住宅が、ぎっしり軒を並べているのを見ることもできた。清朝時代は、紫禁城（現在の故宮）の天安門より高い家を建てることを許されなかったそうで、四合院はいずれも平屋建て。したがって北京のイメージといえば、平面的ではあるがどっしりと落ち着き、豊かな空間の利用を感じさせたものである。黄浦江ぞいに高層ビルの並ぶ上海とは、好対称だった。

## 1. 歴史的な文化都市・北京

北京は西安、開封などとともに中国の6大古都に数えられているが、全国の政治的中心としては中国を代表するに足る歴史を誇っている<sup>(2)</sup>。元の忽必烈が1267年に都を定めた時から1911年の清王朝の崩壊まで、少なくとも600年以上の歴史を有しており、西安（漢、隋、唐）の500年余りより長いのである。

元は、漢民族以外で中国を統一支配した最初の王朝である。しかし、首都（大都と呼ばれた）建設に当っては『周礼・考工記』にみられる伝統的理想を追求、「匠人国を営み方三里、旁三門、國中九經九緯、左は祖右は社、面朝後市」を都市計画の基本とした。すなわち、周囲30kmの方形の都の中では、それぞれの辺に3つの門がある。ひとつの門からは3つに分れた道路が通り、あわせて9本の道路が縦横に城内を走る。城の中心には宮殿があり、天子は南面し、北側に市場を設ける。宗廟と社稷は宮殿の南側に左右対称で配置された<sup>(3)</sup>。

明は元の宮殿を取り壊し、やや南よりに紫禁城を竣工させた（1420年）が、この明にしても、明を継いだ清にしても『周礼・考工記』にみられる都市計画は受け継いだし、驚ろくべきことに、元の大都の道路網、敷地割も、若干の相違はあっても、基本的には現在まで残されている<sup>(4)</sup>。このことは、マルコ・ポーロが大都の風景を

——都城内には至る所に壮麗な宮殿、瀟洒な旅館、りっぱな邸宅が数多く立ち並び、目抜きの大街には各種の店舗が櫛比している。邸宅の建てられた敷地はいずれも正方形をなし、直線で区切られ、各敷地内には広大な殿宇が手ごろな中庭を備えて建てられている。……これら敷地の周囲には人々の往来する小綺麗な通路が通じている。このようにして都城内はすべて方形に区画されることあたかも将棋盤のごとく、その美しさ、巧みな配

置ぶりに至っては、とうてい筆舌の及ぶところでない。

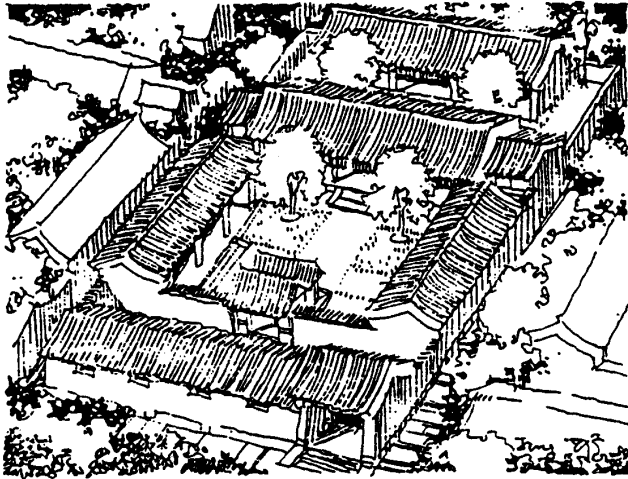
と『東方見聞録』<sup>(5)</sup>に書いているのを読んださいにも共鳴した。「小綺麗な通路」を胡同（フートン、横丁）に、「広大な殿宇」を四合院にそれぞれ置きかえれば、この記述は現在の北京にも通じるのである。

いま、北京には大小合わせて4,550の胡同がある<sup>(6)</sup>。そうだ。「大胡同三百六、小胡同如牛毛」との諺もあって、大きな横丁ならともかく、車も入らない狭い路地は、それこそ牛の毛の数ほど（無数に）あるのだが、いずれにも共通するのは、両側を灰色の石塀に囲まれていることだ。そして石塀のところどころにしつらえられた朱塗りの門をくぐると、「オヤッ」とびっくりするくらいの庭があり、庭を囲むようにして、四周に部屋が並んでいる。これが四合院である。

## 2. 四合院のスケッチ

四合院は中国の代表的な住宅形式で、北京を中心とする華北一帯から吉林、湖南、四川などの省にも分布する。院子（庭）を囲んで東西南北の四周に建物が配置されているのでそう呼ばれるが、このような住宅形式は西周初期の遺跡にすでに見られるし、元の大都で発掘された住宅址も四合院と工字形平面を採用したもの<sup>(7)</sup>であった。ただし、現存するのはごく一部が明代の建築のほか、大部分は清代（1644～1911年）と20世紀初期（民国年間）のものである。日中戦争発生（1937年）以後の新築はみられない。

住宅は北座南面といって、正房（母屋）と大門（表門）ができるだけ南向きになるように建てられている。『周礼・考工記』の「天子は南面す」と共通の発想によるが、この点、北京の胡同はほとんど東西に走っているので、問題はない。逆にいえば、最初から四合院の建設に適した都市計画が行われているのである。



▲ 四合院

建築はおもに煉瓦あるいは土を固めて乾かした煉瓦を材料とし、窓の少ない閉鎖的な様式をとっている。この理由について、『北京風俗図譜』<sup>(8)</sup>は、①北方は木材が少ないから、②激しい寒暑の外気をさえぎり、室内の気温を適当に保つため、③防衛的な意味あいから、などと指摘している。

中国は国全体が万里の長城によって「北の脅威」を防いでいるし、都市は都市でかつて城壁に囲まれていた。住宅もまたそれらに似て、一個の城郭をなしている。小宮義孝も第3の理由を強調、「北京地方の住宅は、かならずその周囲に高壮な煉瓦塼をめぐらし、三方を封鎖された方形にかたちづくられており、その一方に門があるが、これも厳重な扉と鍵とで守られている」<sup>(9)</sup>と書いている。島国でなく、多数の民族が共存・競合する大陸ではのチエであろう。

大門はふつう、赤くペンキで塗った木でつくられ、観音開きになっている。門には真ちゅうか鉄製のノッカーがふたつ、対称的についており、門の両側には石製の小さな獅子がおかれている。特徴的なのは、大門が道路に面して中央でなく、右より（東南隅）に設けられていることだ。風水思想に起因する<sup>(10)</sup>という。

門をぬけると、突き当たりに木製か煉瓦の照壁（目隠しの壁）があって、鳥や動物、花が描かれ、

その下に大きな金魚鉢か植木鉢が置かれている。照壁は東廂房（東側の棟）の壁を利用して設けることが多いが、独立して作られることもあり、その場合は影壁と呼ばれる。照壁や影壁の役割は魔除けにあるとされる<sup>(11)</sup>。影壁のなかには、下のほうに「泰山石敢当」との魔除けの文字を刻んだ石をはめこんだものもある。

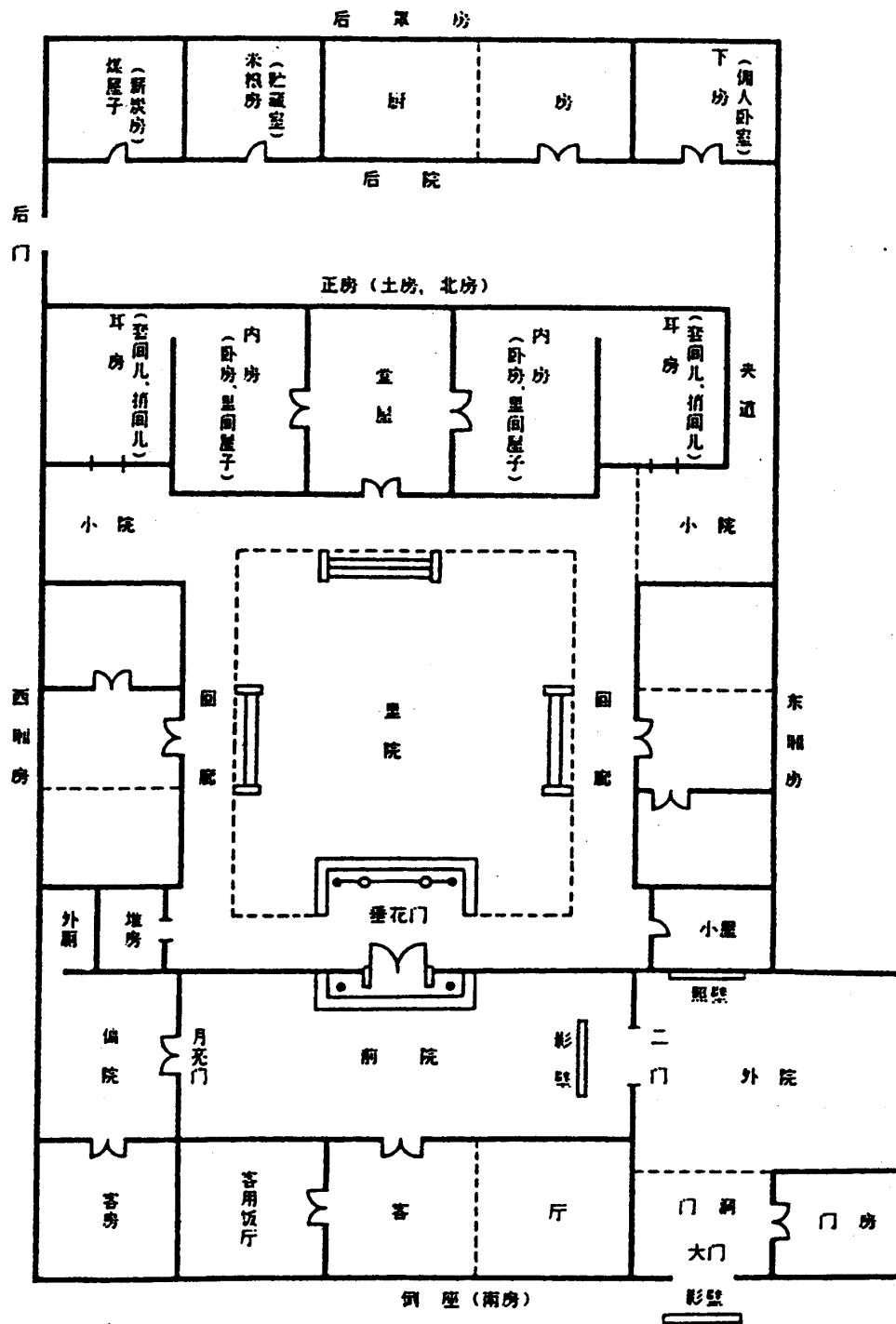
小さな四合院だと、照壁の手前を左へ曲ると中庭に出る。ちょっと大きな四合院では、その間に二門（2番目の門）や垂花門（軒先の四隅に、花のように装飾した吊り束を施した門）、あるいは過房（通り抜けのできる部屋）があり、それらをくぐり抜けて中庭に入る。庭にはかつてザクロ、ナツメ、エンジュや草花が植えられていた。

庭の奥が正房（母屋）で、正面に祖先の霊を祭り、両側が主人夫妻の部屋である。多くは向って右が夫の居間や応接間、左が妻の部屋に用いられる。左右の廂房（わき部屋）が子供たちの部屋、ときには厨房（台所）もここに置かれる。解放前の大きな四合院では、正房の裏に後罩房（ホウチャオフアン）があって、妾や下女が住み、道路ぞいの門房（倒座ともいう）に客室や車夫など使用人の部屋があった。

### 3. 庭のある生活風景

四合院が閉鎖的な住居である理由はさきに述べた。窓は外側になく、すべて内側にあり、中央の庭に面している。庭は中国において、自然の美と親しく交わることを通して精神を豊かにする場所<sup>(12)</sup>である。と同時に、その空間は花を栽培したり、鳥を飼ったり、人々が接触したり、交流したりするところでもある<sup>(13)</sup>。

かつて北京の消夏法をあらわす諺に「天棚、魚缸、石榴樹」というのがあった。天棚はヨシズのようなもので、中流以上の家庭では太陽の直射を避けるため、これで庭をおおい、光の強弱に応じて巻いたり伸ばしたりした。天棚を支える4本の



▲ 四合院の見取図『中日大辞典』より

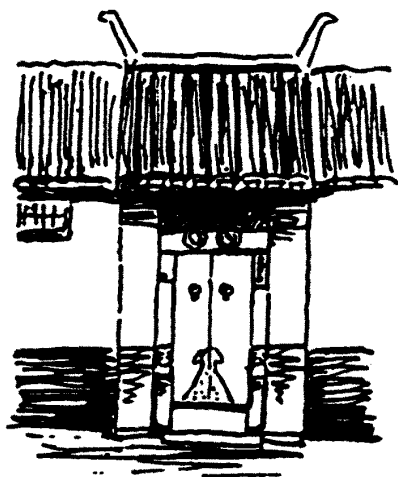
丸太には、飾りとして4つの円形の板がついており、吉星高照（幸運の星が高処から照らしている）の4文字が1字ずつ、板に書かれていた。魚缸は金魚鉢、石榴樹はザクロである。

林語堂の『北京好日』にも「姚家では毎年夏に

なると、屋根と中庭の上、高さ30～40尺に蘆席の涼棚を設け、風通しをよくするとともに、屋敷全体も炎熱から遮断した」とか「炎熱の白昼、人々は室に紗紙を下げて部屋を地下室のように涼しく保っておく」といった記述がある。生活のチエで

ある。

庭植えにザクロが好まれるのは、ザクロは種子が多いからである。多子多福の民衆道教的発想からきている。ほかにナツメ、海棠、ライラックなどいろいろあるが、逆にナツメを植えれば梨や柿は避けるべきだとされる。中国語の発音から、ナツメ（棗）と梨は早く離れる、ナツメと柿は早逝に通じるからである。松と楊樹は庭木にされない。



▲ 四合院の入口『北京風俗大全』から



▲ 庭のザクロと金魚鉢『北京風俗大全』から

民俗学に詳しい鄧雲郷氏も、四合院における庭の持つ意味あいを高く評価、最近出版した『北京四合院』のなかで「この広々とした空間は北京人の性格——どちらかといえばものごとを達観、堅苦しいほど率直で、競争心に欠ける——形成にも影響している<sup>(14)</sup>と述べている。

## II 解放後の住環境とその近代化

中華人民共和国の成立（1949年）当時、北京の住宅はほとんどが清朝以来の四合院で、かなり老朽化していた。市政府は50年代、60年代に酒仙橋、紅廟などにアパートを新築したものの、急増する人口に追いつけず、加えて文革期の混乱で住宅建設が停滞したため、市民1人当りの居住面積は解放当時の4.75㎡が78年には4.52㎡<sup>(15)</sup>と、逆に減少してしまった。発展途上国の多くと同様、中国が基幹工業建設を優先させたのも一因<sup>(16)</sup>となっている。多くの市民は、四合院でのスシ詰め生活を余儀なくされた。老朽化した四合院は、さらに荒廃の度を強めた。

### 1. 厳しい住宅難

四合院はもともと、家族単位（もっとも、解放前は3世代、4世代の同居が多かった）を前提にしての住居だった。ところが、急増する人口<sup>(17)</sup>は住宅難に拍車をかけ、そんな“ぜいたく”を許さなくなった。数家族ないし10数家族の共同生活が当然とされ、現在に至っている。

例えば、『中国画報』89年9月号は「北京の住宅問題」で、「多くの四合院は大雑院（長屋）となり、庭がほとんどなくなってしまった。四面を囲まれた空間は消え去ってしまったようで、息苦しさを感じさせる」と指摘、次のようなケースをあげている。

——西城区東安門北街33番目の四合院は、50年代には200㎡の住宅に10世帯30人が住んでいた。いまはそこに18世帯80人余りが住んでいる。人が多く、部屋が少ないので、各世帯ばぞくぞくと庭にのびていく。庭はレンガと板でつくった多くの小屋に占領された。周囲のわずかな空地にも、各戸のがらくたうば車や自転車置いてある。残るのは、各戸の門口にやっと通じる細長い道だけである。

庭を失っただけでなく、きれいな装飾の垂花門で、いまでもその面影を留めているのはきわめて少ない<sup>(18)</sup>という。あるいは、四合院での生活を

——朝起きると、みな水道の蛇口のところへ洗面の水を汲みに集まり、「お早うございます」「よくお休みになれましたか」とお互いにあいさつをかわします。

と書かれた文章<sup>(19)</sup>を読んでも、大雑院によっては32戸の住民がひとつの蛇口を共同で使っており、行列をつくって水を汲んでいる<sup>(20)</sup>現実を知っていれば、とても“なごやかムード”と受けとめることはできない。

それでも、住む部屋のあるのはまだまし。住宅困窮戸といって①住む家のない夫婦、②一室に2世帯同居、③父母と子が一室で生活、④結婚しようにも住宅のない者、などが全市の約32%、40万戸にのぼる<sup>(21)</sup>という。

夫婦がそれぞれの勤務先の集団宿舍に住んでいて、もし同室のひとが出張したら、夫婦はその機会に臨時に団らんする。これを「遊撃戦をやる」という<sup>(22)</sup>そうだが、現在のわが国では考えられないかもしれない事態であろう。

## 2. 住宅建設の本格化

文革末期の唐山地震のさい（76年7月）、約150km離れた北京でもかなりの被害を出したが、破損、倒壊の多くは昔ながらの四合院だった。このとき中日友好協会の幹部が「中国は解放後、まず食糧の自給体制確立に努めました。その目途がようやく立ち、これから住宅難の解消を——と思っていた矢先に、地震にやられたのです」と、残念そうに語ったのを、いまでも印象深く覚えている。

この発言を裏付けるかのように、北京市は政府の「四つの近代化」政策にあわせ、11期3中全会（78年12月）から住宅建設を本格化させた。とくに85年以後は毎年の竣工面積が500万㎡を突破、89年は550万㎡とピッチをあげた。この結果、市民

の1人当り居住面積は90年9月現在で7.17㎡<sup>(23)</sup>、78年比59%増となった。

この時期の住宅建設で特徴的なのは、ほとんどが5～6階建てのアパートであることだった。81年段階で「都市住宅は5階建てから6階建てがふつうで、今後は平屋を建てるのを許さないことにした」と報じられている<sup>(24)</sup>から、平屋建ての四合院は姿を消すべく運命づけられた、といっている。既存の四合院は、倒れそうな危ない建物が修理、改造されるにとどまった。

北京市の都市計画研究院によれば、今後都市建設に提供しうる土地は100km<sup>2</sup>に満たないし、道路、鉄道、公園などの公共施設建設用地を除けば、住宅建設にあてうる用地は20km<sup>2</sup>弱という<sup>(25)</sup>。であってみれば、高層化による土地の効果的利用は当然であろう。

また、新築のアパートが設備面において、老朽化した四合院よりすぐれていることは、いうまでもなからう。85年の都市住宅調査によると、北京市の45%前後の家庭は専用の台所、トイレを持たず、60%の住宅は都市ガスや暖房の設備を持たない<sup>(26)</sup>が、そうした不便さもアパートの比率の増大によって、低下されつつあるとみていいであろう。

## 3. 商品化する住宅

もうひとつの特徴は、住宅制度の改革によって住宅の商品化が推進されだしたことである。

これまで都市の住宅は原則的に公有とされたため国家資金で建設、労働者・職員に無償で分配、貸与してきた。しかも家賃は1人当り所得の1.2%と驚くほど安いので、国家は建設資金を回収するどころか、維持管理に毎年100億元の住宅補助金を支出せざるを得なかった<sup>(27)</sup>。住宅を建てれば建てるほど、国の負担はふえる一方だったのである。

78年、鄧小平氏が個人の住宅建設を認めるべき

だと提案、80年代なかば国务院に住宅制度改革指導グループが作られ、「家賃を引き上げ、賃金を引き上げ、労働者・職員の住宅購入を奨励する」基本構想が打出された<sup>(28)</sup>。この方針のもと、北京市でも住宅開発会社が設立されて商品房（商品として売買できる住宅）を建設<sup>(29)</sup>、中国工商银行はマイホーム建設希望者を対象に、利回りのいい住宅貯蓄、住宅融資を始めた。

一般的なのは、住宅購入希望者が住宅改築基金会に入会して住宅販売価格の30%を納入、残りは建設銀行から低利で融資を受け、10年以内に返済する。市側はこの資金のほか、購入者の勤務先（企業、機関など）および国から建設費の提供を受け、アパートを新設する<sup>(30)</sup>というものである。90年現在で、北京市は97地区581万 $\text{m}^2$ の住宅改革モデル地区を設定、国・集団・個人の資金を集めて住宅を新築するほか、住宅販売、有償分配、家賃引き上げなど8種の改革を推進している<sup>(31)</sup>。

『北京晩報』が住宅購入者の意見をいくつか載

せている<sup>(32)</sup>ので紹介すると

例1＝5人家族で西城区北営房の老旧住宅(27.2 $\text{m}^2$ )に住んでいた。今回新方式で改築されることになったさい、家族みんな「自分たちの住む家にお金を出すのは当然だし、長い目でみれば採算はとれる」と賛成した。新居は58.77 $\text{m}^2$ ある。次男が勤め先から1万元借り、残り5,400元は自己資金。政府の優遇があったからこそで、もし市場価格で買えば1 $\text{m}^2$ 当り2～3,000元はする。（趙文蔚）

例2＝住宅建設開発会社の説明を聞くと、買取りと賃貸の2種あるとのことだったので、38.23 $\text{m}^2$ の部屋を9,634元で買い、51.04 $\text{m}^2$ の2室を2,050元の保証金で借りた。あわせて1万1,000元以上支払ったが、勤め先で貸してくれたし、結婚をひかえた息子娘も「家を買うのが先だよ」と賛成してくれた。これまでの31.4 $\text{m}^2$ に比べれば、ぐんと広くきれいになった。（秦連英）

住宅購入には、市の優待価格でも1万5,000元

## ●●出售商品房●●

久居喧鬧的大城市，找一个幽静清新的住所谈何容易，其实这并不难，请您到涿州来。

涿州市位于北京南60公里处，是一座具有悠久历史的文明古城，堪称“天下第一州”，京广铁路、公路横环市区，每日数十趟火车往返津京，进城旅游访友当日即可往返，市区街道平坦、整洁，两旁绿树成荫、鲜花斗艳。商业网点密布，文娱设施齐全，医疗条件优越。广阔无垠的郊区地肥水美，瓜果蔬菜新鲜，肉乳禽蛋丰富，是人们理想的居住地。

涿州东方房地产开发公司在市区为您准备了风格各异的商品住房，均由专家设计，结构合理，造型美观，装修华丽，配套齐全，价格便宜（每平方米售价460元），住房为两室一厅、三室一厅、四室一厅，分别为73 $\text{m}^2$ 、96 $\text{m}^2$ 、100 $\text{m}^2$ 。皆为两层小楼，独门独院，互不干扰，都配有厨房、厕所、室内楼梯、水暖电等设施。如果您想使生活安静、舒适，请您购买我公司商品房。

-----涿州东方房地产开发公司-----

- 地 址：涿州市长城桥北（东方地毯贸易有限公司院内）
- 联系电话：涿州333001转429      ●联系人：范文孝
- 在京联系地址：北京市房地产交易所天坛北门对面
- 电话：7013316

▲ 商品住宅の売出し広告

『北京晩報』90.10.27から

は必要である。ましてこれまであまりにも低家賃政策がとられてきた。1カ月の家賃がコカコーラ2本ないし煙草のワンカートンと、タダ同然の料金だっただけに、住宅販売の推進は急速には無理で、「今後数年の進展が期待されている」<sup>(34)</sup>のが現状である。

### III より中国的なものを求めて

住環境の近代化につれて、伝統的な四合院でなく、アパートに住む北京市民がふえた。正確な数字はわからないが、79年段階で「いまや床面積からいえば4対6の割で、古い四合院よりアパートのほうが多い」<sup>(34)</sup>と聞いていたから、それから10年以上たった現在では、3対7あるいは2対8くらいの比率で、アパート居住者が多いであろう。しかし、それだけにというか、消えてゆく四合院への執着、再認識も強まりだした。

#### 1. 四合院の再認識

86年3月10日の『北京晩報』は「北京四合院的社会效能」と題する趙済衆署名のコラムを掲載した。要点は①四合院は趣があり、づくりも精巧で中国古来の伝統文化のひとつの象徴である、②家庭間の連絡と、人と人との交流によって形づくられた社会連絡網は、親近感と穏やかな雰囲気を生じさせ、社会の安定を維持する貴重な要素となっている——と、形態と実質の両面から評価、高層建築における孤独で閉鎖的な生活を批判のうえ、③いまやフィリピンやコペンハーゲンなどの外国の建築家たちが四合院を模した建築を設計している、④北京は人口密度が高いから、高層建築も致し方ないであろう。問題はいかにして高層建築に伝統的四合院の風格を持たせ、四合院の社会的役割を引き出すかである、とするものであった。

この主張はかなりの共感呼んだようで、同月26日の『人民日報』海外版に転載されたし、『人民中国』同年9月号も「四合院の役割を見直そう」

との見出しで要点を紹介した。

解放後の四合院がスシ詰め長屋と化し、心を豊かにするための庭すら失われてしまったことはすでに述べた。にもかかわらず、そこでの共同生活にプラスを見出しているわけで、「我愛北京的四合院」<sup>(35)</sup>は具体的に

◆ある晩、南棟の夫婦のどなり合う声と子供の泣き声が聞こえてきました。四合院の他の数軒の人は、期せずしてみな集まってきてなだめました。実は、子供の学校の成績が悪く、数学のテストから逃がれるため、子供がついに学校をサボってしまったのです。この夫婦は互いに子供のしつけがなっていないと不平をいいあっているうち、カッカとしてしまった、というわけでした。みんながなだめたので、その場の騒ぎは収まり、最後に私の夫（教師）が毎週2回、その子に数学を補習してやることに決まりました。

◆私の娘は小さい時、しょっちゅう病気にかかりました。病気の時は、子供を託児所から引きとって看護、治療しなければならないので、私と夫はやむなく交替で休暇をとりました。この時、東棟の李おばあさんが進んで「お嬢ちゃんを私にまかせなさい。わたしたち年寄2人で病院に連れて行って、注射を打ってもらいます」といってくれました。

◆毎年の春節（旧正月）は、四合院の人が一番楽しい時です。大みそかは、みんなお互いに得意な料理を贈りあいます。夜の11時すぎに大家さんのところに集まり、テレビを見、果物を食べ、思う存分おしゃべりをします。女の子はさまざまな提灯を下げ、男の子は爆竹、花火を鳴らし、中庭で楽しく遊びます。

といった思い出をいくつか記している。

これに対して、北京市が90年11月23日の常務会議で、20余の歴史文化保護街区（町なみ）を決定、その第一種指定のなかに南鑼鼓巷（鐘楼、鼓楼付近）および西四の1条から8条まで（護国寺西方）

の四合院密集地区を加えた<sup>(36)</sup>のは、四合院を形態上から伝統文化と評価、保存にふみきったものである。両地区あわせて70ヘクタール、約100戸の四合院があり、それらの住宅が北京の面影をのちのちまで伝えることになった。

## 2. 新しい試み

こうした四合院再認識の流れのなかで、たんに保存するのではなく、新建築のなかにその長所を取り入れることができないだろうか、との検討が進められた結果、これまでに西城区小後倉胡同と、東城区菊兒胡同の2地区に樓式（ビル型）四合院と呼ばれる新しいタイプのモデル住宅団地が建設され、新聞雑誌を通じて紹介された。要点は次のようである。

### ◆小後倉胡同の場合

小後倉は解放前からのスラム街で、面積1.5ヘクタールに298世帯1,026人が住み、1人当りの居住面積はわずか4.7㎡、しかもひどいことに、公衆トイレと水道蛇口はそれぞれひとつしかなかった。87年、改善を求める住民の手紙がきっかけで、北京市の危険住宅改造テスト地点に指定された。

設計を依頼された北京市建設設計院の黃匯女史らは景山から北京の街並みを眺め、あちこちの四合院の密集した胡同を歩き回って、古都北京の面影を残し、しかも合理的、実用的なアパートの建設に心がけた。

新築されたのは2階ないし6階建てのアパート9棟350戸分で、広さ3,174㎡。各棟の前に庭ややぐらのある門がつくられ、屋根は傾斜のある切妻造り。色どりも赤い門、灰色の壁、濃い灰色の屋根、深紅の窓と、伝統的四合院の様式が取り入れられた。以前からの大きな庭木は、そのまま残された。庭を利用できない2階以上の部屋には、バルコニーがつけられた。

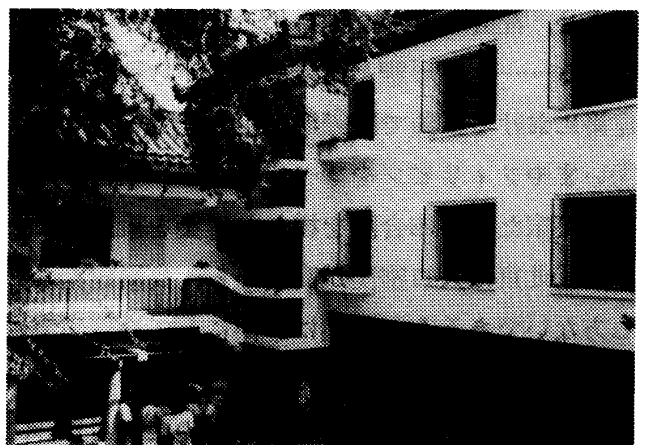
と同時に、保温外壁をつけ、各单元（アパートのひとつの入口、階段）ごとに浴室、台所、トイ

レ、冷蔵庫置場が設けられた。各戸の間取りでは、従来の四合院の欠点を改め、玄関・台所・トイレを大きくし、居間を小さくし、戸棚を多くするよう心がけた。ベランダにも物置がつくられた。

建設資金は北京市が235万元支出、福建省福州市が750万元投資、ほかに住民が購入予約金として支払った100万元があてられた。完成後、住居は1㎡当り300～350元（市価の約10分の1）の優遇価格、5年間の分割払いでもとの住民に売却された。購入資金がない場合は、1㎡当り40元の家賃保証金を銀行に預金させた（利子が家賃に充当される）<sup>(37)</sup>。

### ◆菊兒胡同の場合

同じく市の危険住宅改造テスト地点で、国際建築学会副会長の呉良鏞氏が設計、90年7月竣工した。鐘楼、鼓楼などの文化財に近いので、高さは2階ないし3階建てに抑えられたが、それだけにより四合院の面影を残している。ニレのうっそうと茂る庭を囲んで、白壁に灰色の屋根、朱塗りの門と屋根のヒサシが色どりをそえる。2階には回廊がつけられた。玄関、台所、トイレはここでも従来より大きくされ、戸棚を多く、寝室は小さめにつくられた。2～3階にはベランダや、隣家と共有のサンルームもある。



▲ 北京市東城区菊兒胡同で

住宅建設に先立って89年4月、旧住宅改造合作

社が設立され、住民は合作社員となった。合作社は社員が出資、それぞれの勤務先が協力、国家が支援する方法で建築に当り、完成後は社員に廉価で優先販売される形をとった<sup>(39)</sup>。

竣工間もない90年8月、菊兒胡同を参観する機会があったので管理人に尋ねたところ、この胡同は低い土地で雨が降るとぬかるむし、四合院は老旧化していた。取り壊して2,760㎡44世帯分の住宅を新設、うち30戸はもとの住民が購入、残りは商品住宅として売り出した。商品住宅は1㎡当り3,000元だが、もとの住民は1㎡当り350元の優遇価格で買えるし、勤務先の補助を受けることもできる。好評なので、東城区としては第2期、第3期工事を行い、1万6,000㎡の四合院団地にする予定、とのことだった。

### 3. 今後の住宅建設

北京では古くから「東富西貴、南貧北窮」もしくは「東城富、西城潤、崇文窮、宣武破」といわれ、市南部に位置する崇文、宣武両区の住環境はあまり良くない。しかし、恵まれているはずの東城、西城の両区にしても、旧城内に位置して早くに建造された四合院が多いので、老旧度がひどく、住宅設備もおくれている。改造すべき住宅は全市にわたっているというべきで、北京市当局は老旧住宅を800万ないし1,000万㎡と推定<sup>(40)</sup>している。

これら老旧家屋を対象に、北京市は90年秋までに97の改造テスト地点を設定、うち32地点については改造に着手した。改造対象面積は581.8万㎡にのぼる。また、住宅改造を本格化させてから最近2年間に314戸の商品住宅を販売、3,880戸24万㎡を優遇価格で売却、2,309戸11万㎡を保証金預託つきで貸付けている<sup>(40)</sup>。

新住宅を優遇価格で購入する場合、1㎡当り350ないし400元支払わねばならない。1戸50㎡として1万7,000元（約50万円）ないし2万元である。低賃金政策の中国においては、決して安いといえ

ない。まして、都市住民はこれまで「衣食や日用品は自分で解決し、住宅は政府にまかせる」のが当然と思ってきただけに<sup>(41)</sup>、頭の切りかえが大変だろう。

半面、北京で1,000世帯の住民について行った調査によると、59.5%の住民は「個人が住宅を購入するのを励まし推進するのは、いっそう多くの資金を集めて住宅建設にあてることができ、いいことだと認めている」<sup>(42)</sup>という。住宅の商品化は政府の方針でもあるし、徐々に定着するであろう。

問題は、新築アパートのうち、楼式四合院がどの程度を占めるかである。すでに竣工した小後倉および菊兒の両地区については、「新居もうれしいが、胡同の面影をそのまま残してくれたことに満足している。一種の土着感を与えてくれる」<sup>(43)</sup>との好評をもって迎えられている。そうした評価が定着すれば、資金にゆとりのある限り建設されるであろう。

## IV 住宅政策の展望と課題

### 1. 近代化の前途

李鵬首相は91年3月末の全国人民代表大会における報告で、今世紀中に農工業生産を80年の4倍増とする目標を再確認のうえ、住宅政策については「住宅の無償分配、低家賃といった方法を徐々に改め、各方面の積極性を引き出して住宅建設を進め、人民の居住条件を改善すべきである」と述べていた。

北京市では、この方針はすでに実行に移されているし、今世紀中の目処としている新住宅5,000万㎡の建設と1人当り住宅面積8～9㎡の実現も、さして困難でないと思われる。目標の達成は、快適で便利な生活の普及であり、生活水準の向上と受け取っていいであろう。

ただ、しばしば指摘されるように、近代化は農

工業生産の向上とか、国民総生産（GNP）の増大のみによって達成しうるものではない。文革終了後に「四つの近代化」政策が打ち出された時、学生や一部知識人は第五の近代化、つまり政治の改革こそ必要だと強調していたが、住宅政策においても意識改革をとまなうというか、ソフト面の心のこもった近代化がはからねばならない。

この点、北京の住環境を検討して痛感させられたひとつは、職業や地位によって住宅事情にかなりの差があることだった。というのは、85年のサンプル調査によると、住宅困窮者が32%にのぼる半面、1人当たり8㎡（全市の平均は7.17㎡）を上回る家庭が26.6%あり、うち7.6%は1人当たり12㎡以上の“ゆとりある”住居だった。住宅の所有帰属別には個人所有住宅、解放軍住宅、中央政府関連住宅が恵まれており、地方企業の住宅、住宅局管理住宅がこれに次いでいる<sup>(44)</sup>。住環境における特権行使とか格差は、早急に改められねばならない。

住宅の商品化は、福祉政策の後退と受け取れる側面もあるが、市場メカニズムの原則を取り入れた以上、より徹底されるのは当然であろう。むしろ従来の無償分配・低家賃政策が、国家の財政難をひき起し、住宅建設をおくらせたこと、居住者および国家が維持管理をおろそかにして老朽化を早めていたこと、などいくつかの点を考えれば、制度改革によってプラス効果を十分に期待しうるであろう。

心してほしいのは、冒頭にも述べたように、近代化が歴史文化都市・北京の面影を失わせ、無味乾燥なコンクリート砂漠としかねないことである。とりわけ北京の都市計画や四合院の庭にみられる空間意識は、中国の建築文化の特色とされる<sup>(45)</sup>だけに、大切にされねばならないし、四合院再認識の底流にも、そうした要因があるように思われる。

## 2. 四合院の今日性

ただ、四合院がいかに伝統文化に富む住宅様式といえ、現代社会に十分適応しえないことは、いうまでもない。ほとんどが19世紀の建設だけに、おくれた設備、老朽化した屋舎は致し方ないとしても、四合院そのものの欠点として、①「有錢不住東南房，冬不暖来夏不涼」の諺があるように、東と南の棟は夏暑く冬寒い、②台所、トイレの配置が悪い、③建築費が高く、多くの用地を必要とする、などと指摘されている<sup>(46)</sup>。

かりにも、四合院の再評価、再認識が減りゆくものへの愛着だとか、懐古趣味であれば、説得力を持ちえないであろう。解放後の50年代に、北京を取りまく城壁が惜しまれながらも取り壊されたように、四合院も文化財として一部が保存されるにとどまろう。

四合院再認識の一因に、共同生活からくる人々の堅い絆と助けあいの精神があることは、すでに述べた。しかし考えようによっては、それは一面においてプライバシーの侵害でもある。『人民中国』誌記者は「北京・城壁裏の胡同を訪ねて」<sup>(47)</sup>のなかで

——胡同に出入りするうち、どこそこのヨメがしゅうとめとやりあったとか、どこそこのヨメが男を追っかけたとか、それというのも夫婦生活がうまく行かないでもめていたからだとか、そんなことまでさまざまな話を聞かされました。

と書いている。中国は末端の大衆的自治組織である居民委員会の役割について、憲法第111条で「民間の紛争を調停し、治安の維持に協力し、また人民政府に対して大衆の意見および要求を反映し、提案を行う」と規定している国がらであってみれば、共同生活に異を唱えるほうが少数派なのであろう。しかし、個の確立を犠牲にしての共同生活であれば、いつまでも続くとは思われない。四合院の長所欠点は、正確に把握されねばならない。

### 3. 相克から調和へ

北京の西欧建築は、マテオ・リッチが宣武門内に教会堂を建てた（1605年）のが最初で、それ以後しだいに増加するのだが、その過程における中国の対応について、村松伸氏は①技術としての導入、②擬華風建築の出現、③擬洋風建築の出現と三分のうえ

——近代化イコール西洋化と考える日本人にとって、古建築の修復行為や鉄筋コンクリートによる伝統の模倣、すなわちここでいう擬華風建築は、浅薄でアナクロとしか映らないであろう。だが、この種の「伝統」の復活、再解釈は古今東西でみられる最も普遍的な建築の発展であるように思われる。

と述べている<sup>(48)</sup>。

自己の近代を築きあげること、言葉をかえれば、近代化の過程における伝統文化との相克をどう解決するかは、中国近現代史の重要なテーマである。それが住宅建設にも共通する課題であることは、最近の無計画な高層ビル建設への批判と四合院の再認識からうかがえる。

そうした流れのなかで建設されだした楼式四合院が、相克を調和へと導びくものになりうるのかどうか、まだわからないが、ひとつの新しい試みではある。伝統文化を誇る中国の、歴史文化都市・北京での実験の、今後の推移を見守りたい。

#### 〔注〕

- (1) 『朝日新聞』1990年9月11日「天声人語」
- (2) 陳橋駅編著、馬安東訳『中国の諸都市』（90年大明堂）1ページ。
- (3) 『周礼・考工記』の解釈は、おもに加藤祐三編『アジアの都市と建築』（86年鹿島出版会）246ページによる。
- (4) 前掲(3)の『アジアの都市と建築』247ページ。
- (5) 訳は愛宕松男、平凡社東洋文庫207ページ。
- (6) 『人民中国』86年8月号「北京・城壁裏の胡同を訪ねて」から。
- (7) 平凡社『大百科事典』7. 住居の項を参照。
- (8) 青木正児編、平凡社東洋文庫112ページ。
- (9) 『城壁』（49年岩波新書）11ページ。
- (10) 前掲(7)の『大百科事典』による。
- (11) 前掲(8)の『北京風俗図譜』は、ジャイルスの『支那文化展望』を引用しながら「表門の内側にツイタテがあるのは、悪魔は直線的にのみ動くものであるという考えから、これを避けようとする目的に出たものである」としている。
- (12) エドワード・H・シェファー『ライフ人間世界史・中国』（座右宝刊行会）110ページ。
- (13) 『北京週報』86年13号28ページ。
- (14) 『北京四合院』の内容紹介は『北京日報』90年5月11日「悠悠北京四合院」による。
- (15) 『北京晩報』90年9月25日「北京人的住房大変様」から。
- (16) 『人民中国』87年8月号20ページ。
- (17) 『中国画報』89年8月号によれば、北京市の人口は49年約400万、それが89年には600万人ふえて1,000万人余りに達した。
- (18) 『人民日報』90年6月30日海外版「北京四合院」特集から。
- (19) 孟広学『北京の生活』（花伝社）15ページ。
- (20) 『中国画報』89年9月号9ページ。
- (21) 李国慶「試論我国城市住宅的建設主体和分配問題」『社会学研究』90年4月号59ページ。
- (22) 前掲(20)の『中国画報』8ページ。
- (23) 前掲(15)の『北京晩報』
- (24) 81年9月下旬の『中国特稿』による。中野謙二『中国社会への散歩』（有斐閣）15ページから引用。
- (25) 『北京晩報』91年1月14日「北京下大力改造危旧住房」。
- (26) 前掲(21)の李国慶論文61ページ。
- (27) 『北京週報』91年7・8号8ページ「中国、

## 住宅制度の改革を推進」

- (28) 『北京週報』91年18号11ページ「住宅商品化の改革を速める」。
- (29) 陳真『陳真さんの北京だより』（大修館書店）によれば、中国住宅開発会社が89年までに建設した商品房は997万㎡14万4,400戸にのぼる。
- (30) 前掲(27)の『北京週報』8ページ。
- (31) 『北京晩報』90年10月27日「首都房屋改革稳步發展」。
- (32) 同紙91年2月25日「貧房者如是說」。
- (33) 前掲(28)の『北京週報』13ページ。
- (34) 中野謙二『肌で感じた新中国』（毎日新聞社）112ページ。
- (35) 前掲(19)の『北京の生活』8ページ。
- (36) 『北京日報』90年11月24日「城区劃定20余歴史文化保護街区」。
- (37) 『北京日報』90年11月20日「小後倉危房戸平

地登楼」、『北京週報』91年18号「小後倉胡同の今昔」などを参照。

- (38) 『人民日報』90年7月30日「北京的樓式四合院」，前掲(20)の『中国画報』を参照。
- (39) 前掲(25)の『北京晩報』。
- (40) 前掲(31)の『北京晩報』。
- (41) 前掲(37)の『北京週報』15ページから。
- (42) 前掲(20)の『中国画報』10ページ。
- (43) 前掲(37)の『北京週報』21ページ。
- (44) 前掲(21)の李国慶論文63ページ。
- (45) 王振復『中華古代文化中的建筑美』（上海・学林出版社）1ページ。
- (46) 鄧雲郷『北京四合院』（人民日報出版社）62ページ。
- (47) 前掲(6)の『人民中国』18ページ。
- (48) 前掲(3)の『アジアの都市と建築』250ページ。

## 『中国研究月報』への投稿について

1. どなたでも自由に投稿できます。
2. 原稿は、中国及びアジア地域に関する論文、研究ノート、資料、書評などで未発表のものに限ります。
3. 原稿の標準枚数は、400字づめ横書き用紙で論文は50枚、書評は8枚、その他は30枚とします。
4. 原稿には、投稿者の所属および連絡先（住所、電話番号）を付記してください。
5. 採用された原稿は、すべて署名原稿として扱います。
6. 採用された原稿には、当研究所の規定により薄謝を支払います。
7. 掲載された論文などの抜刷を必要とする場合は、実費で作成します。
8. 原稿は採否にかかわらず返却しません。
9. 原稿の送付先、連絡先 〒102 東京都千代田区飯田橋1-12-12

社団法人 中国研究所編集部 Tel 03-3261-6298 FAX 03-3261-8892

本誌の編集方針、企画等に関しては、下記編集委員会が審議しています。

1990年度編集委員会 委員長 加々美 光行／常務委員：天児 慧，宇野 和夫，大里 浩秋，  
栗原 純，田島 俊雄，田畑 佐和子，並木 頼寿，丸山 松幸